

東海道56番目の宿場町・枚方宿
北部の町の様子が明らかに

今年4月、新町1丁目で住宅新築工事に先立ち、^{ひらかた}枚方宿遺跡の発掘調査(新町地区第41次)を実施しました(写真1)。枚方宿遺跡は、江戸時代に徳川幕府が東海道の延長部とした京街道に設置した公用の荷物を継ぎ送る宿駅の跡で、旅人らが宿泊する^{はたご}旅籠を中心に賑わった宿場町の建物跡などが、今も街の地下に残っています。

遺跡の北部(旧岡新町村)に位置する今回の調査においても、江戸時代前期頃、中期～後期頃の各時代の生活面や、それらを造るための大規模な盛土などを発見しました。

中期～後期頃の工房 中期～後期(18～19世紀前半)頃の生活面では、炭や灰で埋まった土坑が数多く見つかりました(写真2)。土坑から出土した遺物は、火を受けた^{どこう}棧瓦や壁土片を含んでおり、火災と関わるものと見ています。他には、溶けた鉄が付着した^{ろへき}炉壁片もあり、当地で^{かじ}鍛冶工房が営まれていたものと見られます。文献史料によ



写真1 京に延びる京街道と枚方宿遺跡
(南西から撮影)



写真2 江戸時代中期～後期頃 高い所が生活面(北西から撮影)

ると、岡新町村にも各種の商工業者の店があったようです。発見された工房もその一つでしょう。出土した陶磁器類の品質の良さや銅銭の出土量の多さは、枚方宿が宿場町の枠を超えて周辺地域とも絡んだ商工業都市へと発展していったことを示しているようです。

大規模な盛土工事 中期～後期頃の生活面は、厚さ約 1.5m もの盛土をして、淀川方面へ広げて造られていることが明らかになりました（写真3）。この盛土は、周辺部でのこれまでの調査でも確認されてきており、新町地区全体の大規模な土木工事であったようです。この大規模造成は、出土遺物から幕府による枚方宿の整備（寛永期〔1624～1644



写真3 前期後半頃の淀川方面へ下がる盛土の土層断面(南西から撮影)

年〕頃）よりも、少し時代が下る前期後半（17世紀後半）頃のものと考えられます。この頃には、大坂や北河内で頻発していた水害を解消するために、淀川の河川改修工事が行われています。京街道や宿場町の基礎となっている秀吉の文禄堤に対しても、強化拡大ともなる形で、堤（京街道）の川側への盛土による宅地造成がなされたものと見られます。

前期半ば以前の宅地 前期後半頃の大規模な盛土の直下から、前期半ば（17世紀半ば）以前に遡る建物礎石や土間などの生活面が見つかりました（写真4）。これらは、新町地区でも宿場町成立の当初から宅地的土地利用が始まっていたことを示すものです。これが枚方宿近郊の土地利用であったのか、この地区がなぜ岡新町村という名称となったのか、など理解を深めるべき課題は山積みです。これらの課題について、今後も発掘資料の調査研究により解明していきます。（井戸）



写真4 前期半ば以前の生活面を一部検出(東から撮影)

イベント
開催予定

お知らせ

イベント名	開催日
総合文化芸術センター別館で開催します	
① (仮)文化財保存活用地域計画講座	9/26(土)
中央図書館で開催します	
② 古文書中級講座	10/5・19、 11/2・16・30(月)
旧田中家鋳物民俗資料館で開催します	
③ ぐい呑みづくり	7/12(日)、8/22(土)
④ ちょこっと展 「みんなの中のどうぶつ」	7/18(土)～9/30(水)
⑤ 子ども七宝講座	7/23(木)
⑥ 親子メダルづくり	7/25(土)
⑦ まが玉づくり	8/8(土)

◆文化財展示会「考古学からみる地域史・くずは」



輝きプラザきらら展示ルームでは、枚方市の地域史を考古学の視点から深く掘り下げるシリーズ展を開催中です！

第1弾は「くずは」地域にスポットを当て、旧石器時代から幕末までの出土遺物を一挙に公開しています。四天王寺の瓦を焼いた「楠葉・平野山瓦窯群」や、古代から中世に土器の一大産地だった「楠葉東遺跡」・「楠葉野田遺跡」など、地域の

歴史を物語る貴重な遺物が並んでいます。会期は令和8年11月23日(月・祝)まで。